

チラシ

誘う

若い女たちの群れ

丸岡俊行

雨はまだ降っている。悲しくて自分のおっぱいをさわっていると、気持がとても良くて、そうしておやすみの日は大体終わる。今日も、きつと、そうして終わる。缶ビールを、冷蔵庫を開けて、持ってきた。ビールは、好きじゃないけど、ときどき、飲みたいときがある。あんまり酔いたくなくときとか。面倒じゃない男、欲しい。セックスフレンドとかじゃなく、恋人でもなく、空気がみたいな人。

CDを流す。

ベッドに横になる。

そしたら、起きられなくて、夕方になってしまった。カーテンをひいたままのせいもあるけど、薄暗い。

電話がなっている。10回以上、なったあと、チンと切れて、ならなくなつた。

誰だろう、誰でもいい。関係ない。

煙草に火をつける。

薄闇に、火が赤い。

おなかがすいた。冷蔵庫の、冷凍庫のほうをあける。アイスクリームがある。取る。ふたに、かぼちゃと書いてある。唇をなめる。かごの中から、スプーンをとる。ちよつと、きたない。指先でぬぐう。それぞれ、両手に持つて、ベッドに戻る。ふたを取る。煙草を吸う。アイスクリームが明るく浮かび上がる。黄色い。硬そう。膝に手を回して、待つ。がしやがしや、スプーンですくい、食べる。おいしいけど、冷たい。ちよつと、味がきつい。

時計を見る。

8時半だ。

12時になったら、寝よう。わたしは目だ。

おっぱいをつかむ。

ふにやふにやしてる。もっと若いときは、ぴんぴんしてた、ような気がする。思い出すと、かなしい。でも、感じて、きもちいい。

自分で乳首をなめれなくて、さびしい。

両手で、きゅっと握って、からだを振る。

冷蔵庫のところにやって、よいしょって開ける。中をのぞく。牛乳を取る。飲みかけを飲む。なくなった。捨てるのはめんどくさい。そのまま戻す。

口をとんがらせて、ベッドの手前に後ろ向きになる。頭をベッドにくつつける。

汗をかいている。今日はまだシャワー、浴びてない。

パンティがそこいらにㇿ枚くらい転がっている。

食べかけのサンドイッチの端がテーブルの上の、たしか化粧品の間あたりにある。口紅かなにかと一緒だ。乾いて、もう、食べれないだろう。

手の先になにかあって、つかんだ。ソックスだった。放る。

あそこに手をやる。ずぶずぶと入れる。

気がついた。あかるい。朝だ。頭をこする。あくび。へそが出ている。パ

ジャマの上のほうは、ボタンはしてない。おっぱいをこする。

声を出す。元気はすこしある。

立って、トイレ。おしっこ。

うんちもしたくなった。また座る。

流す。

臭い。

顔を洗う。タオルでごしごし。

すっぱんぽんになって、シャワー。

きもち、いい。

あそこと、おけつと、よく洗う。

そのあと、おっぱい。ぶるぶる。

パンツをはいて、タバコ。

テレビをつける。時計を見る。化粧を始める。化ける。

勤め先は、内緒。あとで教える。

堅いところ。

ま、いいか。

*社東京支社。総務課。内容は経理と総務と半々。眉書きは経理主任。でも、給料は安い。

8時から5時まで。5時になったら帰る。

会社を出ると、電車に乗る。20分、乗る。降りるとき、誰にも見られないように気を使う。こんときはいやだけど、仕方ない。

マンションに入る。自分のマンションじゃなくて、アルバイト先。

いつから始めたんだっけ。覚えてない。お客には、いつも、今月から、と言う。すると、喜ぶ。

「おはようございます。」ママに言う。

若い。経営者の彼女。21か2くらい、かな。ひよつとすると、もっと若いかも。化粧がきつくて、香水がくさい。

経営者は、チンピラみたいな男。他に、いつも何人か出入りしている。背景はよくは知らない。テレクラもやってるらしい。

関係ない。

わたしはしあわせをさがしている。

深夜。仕事が一いつ終わって、帰り道、電話ボックスにはいる。なんとなく、吸い寄せられる。番号を適当に押す。

「もしもし。」

切る。

チラシがはってある。事務所もある。

こねこくらぶ

素人多数在籍、チェンジ可能

O*O-**-*****

他にも、二つ、別の番号で出している。別の名前で。

写真の子は可愛い。どこの誰だか知らないけど。

事務所に電話して、今日はもうあがつちゃおうかな。でも、まだ今日は2本だけだし。またにしよう。

PHS がぶるぶる。

「もしもし。」

「あ、ユキ。いま、お客さん、はいったから、ホテル***の***号室。よろしく。」

「はい。」

行って、とんとん。

「はい。」怖い声。

やだ、って思ったけど、黙って立ってた。
ガチャ、戸が開いた。客は顔を出さない。

「失礼します。」入る。

じろ、って、見られる。つらい。

「いいですか」って、言ったら、負け。黙ってるうちに、そのまま、奥まで行く。

間合いを詰めて、ソファに座る。客を見て、品定め。

「吸って、いい」いちおう断って、

まず、一服。こんなやつでも、金のため、と割り切り、

「前金なの。」と言う。

ここでスムーズにいかなかったら、ろくな客じゃない。

「シャワー、先にどうぞ。」

待ってる間、テレビをつける。

かったるい。なんでこんなことをしているのだろう。どうしてここにいるのだろう。

肺がむずがゆい。

男が出てくる。からだをタオルで拭き、はずかしげにこっちを見る。やせこけている。そなえつけの服を着込む。

黙って浴室に入る。服を脱ぎ、便器の上に畳む。空気がひんやりして、涼しい。シャワーの湯を出す。40度くらいにする。

まず、足からあたためる。それから、腰をあたためる。

充分にあたたまってから、胸にお湯をあて、肩まであたたまる。

顔にシャワーを受ける。目はきつく閉じて。湯がばちばちと当たり、はねる。

わたしはしあわせをさがしている。頭に、また、この考えがひらめいた。すると、何だか、楽しくなった。

翌日。わたしは会社でデイスプレーに同かっている。財務ソフトを立ち上げ、伝票を入力。

つまらない仕事だけど、嫌いじゃない。けど、時々、とっても悲しくなる。

寒い。

夕暮れの街の通り。わたしはコートの襟襷を立てる。

内部。

わたしの中のわたし。わたしはどこにいるのだろう。

頭の上の方がもわつとしていて、後の方が頼りない。自分が自分でないみたいだ。

機械的に脚を動かす。コートのポケットに手を入れる。

原因があつて、結果がある。わたしはひとり。わたしはわたし。

わたしは歩く。そして。何もない。

わたしは何をしているのだろう。毎日、むだなことをしている。
むなしい。

髪に手を入れ、かきあげる。

わたしはほとんどしゃべらない。一日中、一言もしゃべらないことがある。
違った。しゃべってはいる。かもしれない。

たしかにしゃべっている。
でも。

ほんとはしゃべりたくない。

しゃべるとそれだけ自分がこわれるような気がする。それだけ。

嫌いだ。みんな嫌いだ。

なんだか、楽しくなるときがある。たまにだけ。そんなときは、ほほえんでしまう。

すぐ表情が消える。なんとなく。

わからない。なんだか、疲れる。よくわからない。

困る。

でも、どうすればいいのかわからない。

毎日が過ぎる。また新しい日が来る。

恐怖。

すがりたい。それがなんなのか、わからない。

なにとも関係がない。

コーヒーをいれる。

飲み終わると、困る。次になにをしたらいいかわからない。

ぼーっとしていると、時間がなかなかすすまない。

気がつくと一日が終わっている。

悲しい。